

巻頭言

協同労働の必然性は、少し外から照らし出される。 その外からの灯りをどうキャッチするのか

田中 夏子（日本協同組合学会会長/総研理事）

3/3に開催された全国よい仕事研究
交流集会の第19分散会報告内容を元
に、本集会で考えたことを記したい。

◆副産物豊かな「小さな図書館」

長野県高齢者生協南信センター「み
んなの家」の「小さな図書館」の取り
組みは、小規模多機能型居宅介護施設
の一角に、ふと、不思議な時空を生み
出す役割を持っていて魅力的だ。村立
図書館との連携で、冊数は限定的だが、
頻繁に入れ替え、購入希望図書のリク
エストにも応えている。期待するところ
は、介護施設の利用者や家族以外の人
たちとの接点となり、つながりができ
ることである。平日は就労組合員も
利用できる。当初、就労組合員の反応
は必ずしも積極的ではなかったようだ
が、本を通じて利用者とのコミュニケー
ションが充実する場面もあり、今は
「やってよかった」と前向き。地元新聞
にも取り上げられ、賛同した地域組合
員*1からは七百冊が寄せられたという。

報告からは日常から発した小さな着
想を育てていくことの面白さが浮上し

た。当初からこうした効果が見込まれ
たわけではないものの、やってみると
多くの副産物が生まれていく、そうし
たプロセスが仕事空間に張り合いをも
たらすのではないか。

◆高度な専門性を探求するからこそ、 必然化する地域での連携

ワーカーズコープふじさわ放課後等
デイサービスたんぼぼは、重症心身障
がい向けのデイサービスで、親御さん、
市行政、そしてワーカーズコープとが
立ち上げた、市民立ともいえる事業所
だ。制度が前提とする人員ではリスク
対応に不安がある。制度を大幅に上回
る組合員を配備し、「障がい起因し
て）発信しにくい子どもたち」に文字
通り寄り添ったケアを行なう。藤沢市
の補助金を活用しているとはいえ、経
営的にはギリギリだ。しかし学卒後の
障がい者の社会参加の場づくりや、生
活介護・支援事業の立ち上げなど、ニー
ズは明確なのに、事業所単独では到底
対応が難しい。そんな思いが膨らみ、
市内の他の事業所との間で協働、連携

*1 高齢者生活協同組合の場合、就労していない地域組合員（サービス利用やサロン活動参加等）がそ野
広く存在する。

が構想されつつあるという。

◆社会連帯活動は、団づくりを後押しできるか？

仙台のけやきの杜、荒町児童館の、報告内容は地域とのつながりを開拓する「畑隊」と「防犯マップづくり」が中心だったが、分散会参加者の関心は、団づくりが難航する中、「現場が分解しように」なりながらも、どうやって社会連帯活動を手放さずに、むしろ深めることができたのか、という点だった。一度人間関係が難しくなると、膠着し、内部で解決するのは難しい。畑隊や防犯マップづくりが、地域の人たちに注目され、評価されたことが、就労組合員の自分たちの仕事に対する確信につながり「みんなでやりたいことに挑戦できる場」との思いが少しずつ共有されていったという。

◆協同労働の必然性は、少し外から照らし出される

私は、自分が高齢協の非就労の理事となって以降、この集会に参加するのが楽しみになった。研究者として関わっていたときも発見や感動があり、大学の職場に置き換えて考えるのも面白かった。しかし現在は、もう少し自分の日常に引き付けた聞き方になっている。目下の関心は、「協同労働」というワーカーズコープの発明を、高齢協の

現場での応用も含め、どう活かすか、だ。

「地域に踏み出す」とか「社会連帯活動」を言い出すと、慢性的な人手不足の中、「日々の事業を滞りなくやり遂げること」「目の前の利用者さんへのケアをしっかりとやること」を最優先すべきで、「地域へのアプローチは次の段階」との意見に必ず出会う。当然だ。しかし、目の前のことを固めてから、その後地域に踏み出すべき、というごく当たり前の順序が、ワーカーズコープの実践では覆されていることが、今回の諸報告からも明らかだ。

職場で協同労働のワークショップを実施すると、圧倒的に「意見がいいやすい」「上下関係に縛られずものが言える」「みんなの意見が尊重される」等、職場の人間関係にコメントが集中する。身近な働く仲間相互の信頼関係は何より大事だ。利用者からの反応はもちろんだが、もう一回り広げた社会からの認知や、地域からの「一緒にやりませんか」とのメッセージが、就労者相互の関係に終始しがちな協同労働を解きほぐしていく。ただ、地域との関係を深めていく過程で、何がどう生まれるかは未知で、生まれないかもしれない。しかし、地域の声に耳を傾け、一緒に考え、やりたいことを持ち込んでもらい、共にとりくむ場面を積み重ねることで、協同労働のすそ野がひろがるはずだ。